

それは偶然の出会いからはじまった必然のドラマ

能登演劇物語

【第一幕】

どうして能登だったのか？

日本演劇界の重鎮、仲代達矢さんと七尾市との結びつきについて、多くの人がこう尋ねる。仲代氏自らも後に語るように、その出会いはどんな脚本より劇的だった。

幕開けは昭和58年。家族旅行で能登を訪れた仲代氏は、知り合いを訪ねて旧中島町に立ち寄った。波静かな内湾の景色、黒一色の瓦と白壁の蔵が織りなす町並みに鮮烈な印象を受け、ふと「能登本来の美しさを発見することが文化なんだね。こんなところで、無名塾の稽古がで



きたら」とつぶやいた。この言葉が、能登に演劇という種をまくこととなる。

人づてにこの一件を聞いた旧中島町はすぐに行動を起こし、昭和60年、無名塾の能登中島合宿がスタート。当初は民家で分宿し、稽古は武道館や中学校体育館で行われた。演劇とは無縁の土地で「無名塾」を知っている人はほんのわずか。「無名塾ってどこの学習塾や？」と聞く人も一人や二人ではなかった。だが、もともと情に厚いのが能登人気質。塾生の礼儀正しきや夢に向かって努力するひたむきな姿

に、食材の調達を手伝ったり、差し入れをしたりする住民が現れるとその輪は一気に広がり、互いの距離も縮まっていった。

舞台稽古の公開を機に、練習とはいえ本物の芝居に接し、迫真の演技に魅了された人々の間で、演劇に対する関心が日に日に高まり、東京公演開催時には観劇ツアーが組まれるほどに。演劇熱はいつしか「本物の芝居をこの地で観たい」という機運となり、劇場建設は住民共通の夢として語られるようになっていった。

平成に入り、全国ではふるさと創生事業や若者定住促進などの地域づくり事業が各地で進められた。全国的に文化会館や劇場などの建設が進められたのもこの頃のこと。

平成5年、旧中島町でも地元の夢だった劇場建設が動き

始め、地元資源を生かし、「無名塾合宿のまち」を活用した、仮称「中島町演劇文化ホール」という全国的にも珍しい演劇専門の劇場を造ることが決定した。すでに能登と深い縁で結ばれていた仲代氏はすでに監修を引き受け、設計者で無名塾巡演へ同行。第一線で活躍してきた役者ならではの視点から各劇場の長所や短所を熱心に指導した。国内で類を見ない仕掛けとして、「舞台の後壁が開いて、海をバックに芝居ができないか」と提案したのも能登を愛するが故の仲代氏のアイディア。これまで

に例が無いため、設計者は東奔西走。紆余曲折を経て、造船所のハッチを活用することで実現にこぎつけた。建設場所が海浜ではなかったため、「バックに海」という構想は実現できなかったが、ホリゾン（舞台奥に設けられた壁）

が開き、里山の借景が舞台と一体となる能登ならではの豪快な演出が可能になり、外舞台へと広がりを見せる幻想的な芝居は、能登観劇の魅力として全国に発信されることになった。

能登演劇堂の起工式に寄せられた仲代達矢夫妻の書簡に、演劇文化の振興と建設される劇場の将来像について、先見の銘が述べられている。

人間と人間が出逢い、暖かくかわり合うことの大きな力を今しみじみと不思議に思い、驚きとそして喜びを禁じ得ません。

この劇場の中で、どれだけ濃い劇世界がくりひろげられ、どれだけ多くの人たちに濃く影響し、かわりを持つるか

はこれからの、みんなの問題です。

本当の香り高き文化の芽を、この土地に力強くはぐくんで行ってほしいと願っています。それを長く継続していくことは大変なことだと思います。

この劇場が未長く人々の情熱に支えられ、人々に感動を与え続ける小宇宙になりますように心から祈っています。

無名塾 仲代達矢 隆巴

住民の思いがカタチになったホールは、贅肉を切り落とした「芝居のための劇場」。祈りの意味でもある「堂」の名にふさわしい風格ある造り。これらに、能登からの演劇文化の発信をめざして「能登」の名称を冠し、能登演劇堂と命名された。能登に演劇という文化が芽吹いた瞬間だった。

(次月号へ続く)